

龜井勝一郎全集

補卷二

講談社

龜井勝一郎全集 補卷二



昭和四十八年十二月二十日 第一刷発行

定価 一三〇〇円

著者 龜井 勝一郎

発行者 野間 省一

発行所 東京都文京区音羽二一二―二一
株式会社 講談社

郵便番号 一一二
電話 東京〇三(45)二二二(大代表)
振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
© 龜井勝子 昭和四十八年

Printed in Japan

龜井勝一郎全集 補卷二

編
纂

山 丹 中 河
本 羽 村 上
健 文 光 徹
吉 雄 夫 郎

補卷二
目次

時評 拾遺

私の設計	三	岩波文庫の功罪	三
近代日本の悲劇を凝視すること	一四	一、この夏の生活プラン 二、ぜひ読み	
教養	一五	たい本 読ませたい本(回答)	七
日本人の生き方に関する50の質問と答	七	現代日本語の成立について	六
皇太子	二〇	シナリオを読んで	四
文化国家の行方	二	混乱への抵抗像	四
山陽随筆	三	東京文化と地方文化	六
古典復興	三	政治青年と文学青年	六
政治と文学	二四	茶に親しむ	五
混血と文化	二五	文学狂女	五
平凡な夫婦	二七	日本文化の根本問題	六
愛と家庭の被害者	二六	私の親孝行論	九
忘れる恐しさ	二九	二十世紀日本の理想像	三
家庭と読書	三〇	現代の諸問題と仏教	四

ことしの抱負……………	二二	表現のむづかしさについて……………	二七
政治と友情……………	二二	「万葉祭」を（回答）……………	二七
話しあひの時代……………	二三	偏見について思ふこと（回答）……………	二七
戦後十年の明暗……………	二五	古典への道しるべ……………	二七
いかなる意味でも検閲制度を 復活させてはならない……………	二六	日本上代文化と仏教芸術……………	二七
知性について……………	二六	新しい人間像……………	二八
「接木作用」の苦しみ……………	二三	芸術と民族性……………	二九
美術の条件……………	二五	私の宇宙旅行（回答）……………	二九
文学と美術の交流……………	二三	現代語についての感想……………	二九
回想の二・二六事件（回答）……………	二五	「日本人」を見なほす……………	二九
万葉集を基準として……………	二五	日本文化の特質と道德教育……………	二五
拒絶の精神……………	二五	国境あらそひ……………	二五
文芸家は国語国字問題を どう考へてゐるか……………	二六	ラジオ企画委員会……………	二六
飄々として童心……………	二六	「大和路」入江泰吉写真集「京都」 福田勝治著……………	二七
持久の精神に注目……………	二六	言葉の改革といふもの……………	二六
十年偶成……………	二六	ソ連の態度に失望……………	二六
「古典」とは何か……………	二六	函 館……………	二六
		実証的精神の試練……………	二六

前例のないお仕事	二五
現代の危機と教育	二五
実証性と総合性	二六
著作家の国際的な政治感覚	二六
すべては自然に	二七
茶道私見	二七
和の世界	二七
流れ流れて	二七
豊作の野づら	二七
「とりもどした瞳」	二七
感想	二八
流離型の思考	二八
女性風土記	二九
これからの女性への注文	二九
皇太子の訪米に反対する	二九
独特な「詩と真実」	三〇
悪夢の一二三	三〇
ふるさと風物誌	三〇
私の教育観	三〇

戦争の危	三〇七
マンネリズムを避けよう	三〇八
訪中日本文学代表団からの便り	三〇九
政治と文学	三〇九
平和と恐怖	三〇九
古代大和の跡をめぐって	三一六
日本語を守らう	三一五
三つの課題について	三二六
にせもの	三二二
夕閑帖	三二二
七月二日の星	三二二
オリンピックク馬鹿	三二三
海辺の感想	三二五
危機とのん気	三二六
ごはんとライス	三二六
アジアの留め男	三三〇
怪談	三三〇
ミコヤン氏の来朝	三三三
勲章と博士号	三三三

超党派的になすべきこと	三六
現代の恐怖	三八
老人とは何か	三九
人類愛護週間	四一
国語と愛国心	四三
要するに	四五
どろぼう考	四六
頭のわるくなる本	四七
忘れるといふこと	四九
なぞの国	五〇
電話魔	五二
スピード時代	五三
ひいき	五五
猿の進歩と人間の退化	五七
重要だ、重要だ	五八
思考停止	六〇
クリスマスの思ひ出	六一
心のなかの頽廃	六三
娘と私	六五

健全な読書傾向	七六
日本的思考の原型	七八
矛盾する「芸」と「行」	八〇
民族文化の危機	八三
民族の幸福と退廃	八六
明治九十五年目に思ふ	八八
興味深い新思想の伝来	九一
尽きぬ大正つ子の恨み	九四
トーキョーびとの行くへ	九六
光明皇后	九八
踊り子	一〇一
盲目の聖者	一〇三
私の感銘した本	一〇五
精神の健康診断	一〇七
鑑真和上円寂千二百年記念会の 発足に当つて	一〇九
石獣頭	一一二
原始古代の心	一一七
宗教と文学	一二九

仏教における人間の研究……………	四〇一
青葉の影のもとに……………	四〇三
現代と病者の自覚……………	四〇七
「人民中国」発刊十周年に当つて……………	四一〇
雄大な叙事詩の世界……………	四一三
民族独立の大切なさゝへ……………	四一六
読まれてゐる教養書……………	四二七
スピーチの秘訣教へます(回答)……………	四二七
男からみれば……………	四二七
古典と現代……………	四二七
飛地文化地帯……………	四二八
古典と信仰の世界……………	四二九
精神の古墳をめぐる……………	四三三
思ひまどふことは……………	四三七
今週のまど……………	四三九
有色人種……………	四四〇
けむりの消えたあと……………	四四二
あまりにも親切……………	四四二
スポーツと美術……………	四四二

アジア人であること……………	四四二
大きな声と小さな声……………	四四三
紀元節をめぐる……………	四四四
不愉快な母子像……………	四四五
小さな期待……………	四四五
アジアのことはアジア人で……………	四四六
関心と無関心……………	四四七
推薦者の責任……………	四四七
反面教師……………	四四八
政治家と魅力……………	四四九
早期発見……………	四四九
値上げの順序……………	四五〇
「世界的」と「日本的」……………	四五二
大事件と小事件……………	四五二
「日本美術百選」異論……………	四五三
梅花ひらく……………	四五三
関西の友人たちとともに……………	四五四
日本と日本人とは何か……………	四五六
奇妙な文学研究……………	五〇八

柔らかなる心	五二
私の本だな	五三
魯迅逝世三十年を記念して	五四
歎異抄と現代	五七

解題	五四
----	----

詩評

拾遺

私の設計

第二東京

私達文筆を職とするものにはまづ落着いて読書し静思し著作出来る場所が欲しい。奥多摩の川べりに二百軒ほどのさびのある貸茶室を建てれば学者も政治家も文学者も都ちんをさけて構想し創作するにふさはしからう。料理屋もあり、恋人御同伴にも結構といつたところを作りたい。ハイカラな人達のためのハイカラなサナトリウムや別荘は浅川一帯の高原に設けて教会や音楽堂もよろしからう。そのためには、電車が奥多摩、富士山のふもとまで直通し、ドライブをやりながら都心へ通へるやうにならなくてはならない。私達が日比谷や上野まで行かねばならない図書館も三多摩に欲しい。万葉東歌にうたはれた武蔵野市一帯のために祖先の遺跡、遺産をあつめた日本風な郷土図書館、立川か八王子あたりには科学図書館、われわれが仕事をしに行く奥多摩には文学図書館だ。その上武蔵野の一帯には共産村、デモクラシー村、フアツ

シヨ村等々モデル村を作つて理想社会の実験をやつてみたらいいだらう。

近代日本の悲劇を凝視すること

敗戦後六年間の文学、とくに小説を題材の上から眺めてみると、姦通と情欲を扱ったものが圧倒的に多い。長いあひだの圧迫からきた一種の人間解放かもしれないが、他方では社会的不安が激しくなつてゐるにも拘らず、さういふ問題を取りあげた作品は実に少い。かういふ状態に終結を告ぐべきときがきたと思ふ。

敗戦といふ事實は決して短い期間の結果でなく、明治、大正、昭和にわたる近代日本の運命に結びついた悲劇である。広い歴史の眼と、深い文明批評能力が今日ほど作家に必要な時期はないのだが、これは講和成立後一層切実に要求されると思ふ。むろん相当の期間を経なければ作品化することはむづかしいが、文学者の視野がもつと拡大されなければならぬ。フランスの近代小説が次々と翻訳紹介されてゐるが、手法を学ぶのみで彼らの時代苦や精神上の格闘を学ぶことは甚だ少いやうに思はれる。

私のとくに強調したいのは東洋人としての自覚を再確認することである。近代日本はヨーロッパを学んで文明化したことが、その反面に東洋を忘れ、あるひは蔑視した。今度の戦争で最も迷惑をかけたのは中国であり、その他フィリピンから印度にかけて、要するに近代日本は他の東洋民族の犠牲において自己保存を企てたといつてよい。これを私は近代日本の悲劇とよぶ。つまり日本はアジアの裏切者となることによつて生存してきたのである。

中国共産党と和解することは、おそらく至難であらう。しかしどんな長年月を要しても、日本は中国人の幸福のために技術と藝文をもつて奉仕するといふ誠意を失つてはならない。これは贖罪の意識である。主義や国体が異つても、和解の善意あるところ道は開けると思ふ。この点で日本はまた印度と密接に手をむすび、要するにアジアの平和の支柱となるやう、その方向へ一歩すすむ覚悟が必要であらう。

しかしこれによつて排外主義におちいつてはならない。何事でもアメリカかソ連かといふ風に二つにわけて、それを極端へもつて行くのはよくない。また性急に事を成就しようとするのもよくない。五十年はどうかゝつて着々と一歩づつ前進する、さういふ図太く逞しい神経が必要である。米ソ対立は事實だが、その間にはさまつて徒らに恐怖し神経衰弱になるのは何よりも避けねばならない。はつきりした理想をもつこ